

令和四年大晦日のひとり言

酒井 董美^{ただよし}

獅子舞に使われる獅子面（東村山市・坂本勝恵さん提供）

大晦日の今日、東村山市の坂本勝恵さんから、メールでお送りいただいた獅子舞に使う獅子頭のかわいいお面の写真である。

メールによると、東村山図書館で一月に行われる「子育て広場」などのボランティア活動で、簡単な獅子舞をする予定とか。お獅子を手にしてのそこの文言は「てんつく、てんつく、てんてんてん、皆さま、とくと、ごらんあれ、東村山図書館に、めでたやお獅子か、きてござる……」で、こううたいながら、お獅子の口をパクパク動かすのだという。坂本さんのメールをかいつまんで紹介したのであるが、坂本さんはさらに「お獅子は日本の伝統なので、伝えていきたいです。」と結んでおられる。図書館に集まった子ども

たちは、かわいい獅子のお面たちをきつと大歓迎することだろう。

東村山市といえば東京都下の都市の一つであるが、大東京の中にあつてこうして子どもたちに、日本文化の雰囲気を感じさせようとする心意気を尊いものと思いたい。そしてこの試みは秋田県男鹿半島に伝わるナマハゲの風習につながるものと思うのである。

ナマハゲ行事を簡単に述べれば、大晦日の夜、赤鬼や青鬼の面を付け、藁蓑に身を包んだ若者が、木の包丁と桶を持ち、「ナمامコ剥げたか、剥げたかよ」とおらびながら各家を回り、「親の言うことを聞かない子どもはいないか、いたら連れて行く」と各家を触れ回り、怠惰を戒める。ナمامコとは仕事を怠けて囲炉裏の火に当たっていると、皮膚が赤く染まることを指している。鬼はそれを取りに来ると言われているのである。そしてその鬼は本来祖霊神である。親は「うちの子は親の言うことをよく聞くよい子どもです」と答えると、鬼たちは「それならよい。今年は陸では豊作。臣では豊漁」と寿ぎ、ふるまわれた酒などを飲んで去って行く。

鬼に扮する若者は、青年団長や副団長とされていたようだ。現在このナマハゲは国の重要無形民俗文化財に指定されている。

全国各地にはこれに類する行事が残されているようだ。島根県鹿足郡吉賀町ではかつて「節分の夜、囲炉裏に当たって仕事をさぼっていると鬼がアバミを剥ぎに来る」と言い、アバミは先のナمامハギと同じで、このことをアマミハギと言っていた。

東村山市の獅子舞は、元々はこれらの伝統行事の系統に、間違いなくつながるものであると筆者には思えてならない。たまたまいただいた坂本さんのメールに添付されたお獅子のお面から、日本の貴重な民俗について考えさせられたのである。